

四月八日馬関電

電受第 號

19

Muten,
Shimonoseki.

195. Corea is at present our ally and in the state of hostility towards China. What steps must be taken to restore peace between Corea and China after the conclusion of our negotiation for peace with China. Judging from the former relations of the two countries it is whether probable that China will send for this purpose special Envoy nor will receive Korean Envoy on the same mission. I should like to know your opinion about the steps to be taken respecting the question. What has been attitude of Chinese Plenipotentiaries towards our proposal. What is the prospect of peace negotiation in general.

Enoy

Fusan April 8 '1895
Reid " " "

MT

1615

1496

34

次官

大臣

内閣

通商局

通商局

大正五年五月十五日接奉 主官 政務局

機密第五五號

朝鮮内閣、分給不任辭職勸誘ノ件

朝鮮ノ現内閣ハ舊テ報告ニ及ビタル如ク各年十
二月十七日ヨリ組織セラレ其ノ人々ハ総理大臣金宏
集外務大臣金允植及支大臣魚允中農商大臣嚴
在永學務大臣朴定陽内務大臣趙義淵(元代理)
承務法務大臣徐光範軍務大臣趙義淵(元代理)
工務大臣申箕善ハ久シ志清ニ其色ニ居任セシ處再
三ノ詔命ニ因リ一度上京出動シタルモ直チニ歸郷
シ其日協辦金嘉鎮氏ハ始終其代理ヲ為セリ右内閣
員ニ就キ之ヲ色別スルニキハ

金總理

金外務

魚度支

大正五年五月十五日接奉

MT

1615

1497

1497



一在草魚園トオク侵食
 リニ氏ハ原守派としテ多少支那臭味ヲ排シ大
 陸君トハ終年夏已来ノ向縁モアリ前内政ニ在ッテ
 ハ有為ノ人々ナレハ権力自ラ此ニ帰スルカ如ク而シテ
 内政書記官長ノ地位ニ當ル命去清ハ其參謀ニ
 ガ如シ又

朴内務 徐法務

ノニ氏ハ新ニ外國ヨリ還歸シタル廉シ以テ改新派
 ト称セラレ朴氏ノ如キハ國王ノ駙馬トシテ名位各
 大臣ノ上ニ居リ且ツ威カニ兩陛下ノ御信任ヲ得シ
 ルニ付其権力ハ幾シト原守派ヲ凌駕スル勢有之其
 外日本派ナル金嘉鎮安副將趙義淵ノ云氏ハ
 自ラ一黨ヲ成シテ中立ノ姿シ有セリ前陳ノ有様
 此ハ若シ平常トテハ万々協和一致シテ同内政ニ立

MT 1615 1498

可キ見エナキモ目下國勢艱難恰モ胡越の
 舟トモ申ス可キ時節殊ニ各大臣ハ嚮キニ協同一
 致以テ國事ニ從フ可キ旨ヲ誓約シ本官モ亦
 内閣組織ノ初メ新内閣派ノ人々ニ向ヒ嚴重ニ
 忠告シテ分裂ヲ防ギ至キナルニ甘容易ニ不和
 シ来スヲナカル可シト考居リテ處新内閣組織
 後二三週日ヲ経テモ猶ホ旧派ノ人々ハ依然諸事
 シ專斷シテ新任各大臣ニ相談セサル旨ヲ新派ノ人
 々ヨリ苦衷有之ヲ二月月初閣議大臣ニ向テ毎
 三日一回内閣會議ヲ開キ重要ノ政務ハ内
 閣會議ヲ經タル後上裁ヲ得テ施行可成
 旨勸告シ當分其方法ニ從テ行ヒ来リシ處新派
 ノ議論ハ往々過激ニ涉リ熱心ニ事大ノ旧例ヲ破壞
 セレシ勉メ旧派ハ之ニ及ビテ差支ナキ限リハ旧例ヲ維
 持セシトスル頃キアレハ双方ノ間ニ漸ク衝突シ生スル
 ニ至レリ今双方ノ内幕ニ立入りテ之ヲ分析スルニ
 旧派ノ人々ハ朴淳ニ氏ヲ疑ヒ此二人ハ新内閣
 ヲ歸來シテ海外ノ事情ニ通シ居ル上背後ニ日
 本政府ノ援助ヲ有スレハ早晚政府内ニ跋扈スル
 ニ相違ナシト達シ且ツ嚮キニ二三大臣ニ專斷
 シタル文武官ノ進退懸隔モ今ハ新派ノ諸大臣ヲ
 牽リテ自由申ナラサル意モアリ旁以テ新派ノ人々
 疎外シ三度ニ一度ハ相談ニ及ハスレテ事ヲ決行
 スルヲアリ又新派ノ人々ハ金魚ノ曰大臣ヲ以テ事
 大ノ餘衆ヲ帶ヒ陽ニ改革ヲ唱フルモ内心大臣君
 ノ指揮ニ從テ事ヲ處分スルモノト達シ早晚

在朝鮮國日本公使館

MT 1615 1500

MT 1615 1499

之ヲ政府外ニ逐出し政府ヲハ新派ノ一手ニ掌握セ
 ント企圖シタルハ衝突ノ根源ニテ猜疑離間又外ヨリ
 之ヲ乘シ大院君此機ニ乘シ混雜ヲ興サシメント謀リ
 屢々人々向ニ總理外務支ノ三大臣ハ我黨ナレハ能
 シ我指揮ノニ從フモノナリト物談リタルノ新派ノ人々
 傳ハ板コソ曰ハク諸大臣ハ大院君ト結托シ居ルニ相違
 ナシト益々疑ヲ属シタル處忽チ又大院君ハ霜ニ曰ハク
 通謀シ朴徐二氏殺害ノ計畫シ爲シ居ルト傳フル者有
 シ由ニテ甘疑惑益々相高リ所謂ニ疑心暗鬼ヲ生
 スル勢ニ陷リ申ス之ト同時ニ反對派ノ疑惑モ益
 シ相高リ以テ爲ラシ林氏ハ國王王妃ヲ戴キ傍ラ日
 本公使ノ勢威ヲ藉リテ政權ヲ專ニセント企圖シ居
 レルモ直サス第二ノ勢道ナリトテ其專横ノ廉ヲシ
 在朝鮮國日本公使館
 答テテ之ヲ以テ對スルニ至レリ抑ハ朴氏ノ國王王妃親
 近ヲ得タルヲハ最初本官ノ忠告ニ出ラタルヲニ當
 王室ノ習慣ハ常ニ國王王妃ノ側ニ伺候若シハ奉仕
 スルモノハ宗室外戚内官若シハ親狎ノ近臣ニシテ國
 務大臣ナドハ國王ニ於テモ別見ヲ賜フリ甚シキナリ
 況ンヤ王妃ハ古來ノ慣例ニ於テ全ク謁見ヲ許サレ
 ス又國王ノ別見トモ儀式一邊ニ止マリ政事上ノ
 奏聞ハ皆ナ承政院ニ出ス夫ヨリ内官ノ多シ經テ更
 リ爲ス例トナレリ故ニ國王王妃ノ周圍ニハ所謂ニ宗
 室外戚ノ外狎邪小人ノ集合ナレハ由陛下ハ恰モ霧
 中ニ彷徨セラレ疑惑危懼ノ四字ヲ胸中ヨリ去ラセ
 ラル能ハヌ又次申ナリ幸ニ朴氏ハ順良ノ性質ニシテ
 外國ノ事情ニ適シ居リ且ツ其身附馬ナレハ王妃

MT 1615 1502

MT 1615 1501

ニ拜謁スルヲ許サレテ甘曰氏シお陛下ニ紹介シ中
外ノ事情ヲ通スル増補ト為サハ内官押臣等ハ淳言
虚説ヲ逞フシテ西陛下ニ惑ハス得ス所謂ニ暗夜燈
ヲ掲ケタル位ノ効能アル可シト豫期シタル處外間ニ其
賢情ヲ快ラス却テ之ヲ以テ朴氏ヲ攻撃スル口實トハ
為スニ至レリ(但し朴氏雲中ニ出入シタル以來中外ノ情意
ハ稍々疎通シタルモノ如シ)

本年二月初旬訓練大隊長申泰休ノ進退ニ付朴内
務ト趙軍務トノ間ニ一衝突興レリ右申泰休ハ鄺
キニ内五ノ同意ヲ以テ上奏シ遂テ參領(少佐ニ當ル
ニ至セラレタル處)後朴内務大臣ヨリ四人ハ去甲申
年明治十七冬ノ變亂ニ袁世凱ノ先鋒トシテ王宮
ニ攻入リタル方ナレハ之ヲ隊長トスルハ不都合ナリト

在朝鮮國日本公使館

ノ議論出テ若シ何人ヲ免職セサルナラハ内務大臣
自ラ辭職ス可シトノ決意ヲ示シタルヲ以テ軍務大
臣ハ大ニ當惑シテ當館ニ來リ内々本官ノ意見ヲ
尋ねタルニ因リ本官ハ内務大臣トシテ武官ノ進退
干渉スル職權外ナリテ意ヲ以テ朴氏ニ忠告シ其
事一旦放棄ニ歸セシカ夫ヨリ趙軍務ハ全ク意ヲ
決シテ四派ニ身ヲ寄スルニ至レリ
其後當リテ内五ニ於テ新ニ年号ヲ立テ在松
坡ノ清帝功徳碑ヲ作シ迎恩門ヲ除キ清使接待
ノ為メ古來設ケタル慕華館ヲ濟院ヲ毀ツノ議ヲ
テ新四兩派ノ爭論題ニ上レリ其内功徳碑ヲ作シ
迎恩門ヲ除クハ四派ノ同意ヲ得タルモ年号ハ既
青國ノ年号ヲ廢シ開國何年ト稱スルニ上ハ新ニ

MT

1615

1504

MT

1615

1503

年号ヲ興スミ及ハス且又幕府領弘濟院ノ兩建
物ハ故ラニシテ毀ツミ及ハス其名ヲ改メテ地ニ使用シ
テ差支ナシトシ議論シ以テ曰派ノ人々之ニ同意セサ
ルニ付遂ニ一考ノ問題トナリ國王ニモ新ニ年号ヲ興
スヲニハ稱シ仰曰意ノ傾キアリシモ本官ハ目下ノ急務
ハ猶立ノ基礎ヲ鞏固ニス可キ實務ヲ舉グルニ在リ
煩々タル虚名ニ拘泥スル時ニアラストノ趣意シ以テ
兩派ノ人々ニ志告シタル處新派ノ人々ハ不満足ナカラ
モ一時本官ノ説ニ服シタリシカハ續キ法務參議張
傳氏ノ佳退ニ付兩派ノ間ニ再ヒ小衝突興レリ折々張
傳ハ法務衙門ニ於テハ不利ノ一人ニテ累ニ同衙門
辯金鶴羽ノ暗殺セラレタル後ハ同衙門ノ權力ハ幾
シト同參議ノ一手ニ歸セシ有様ト為リ曰氏又曰派
命去瀆ホト親交アリテ有ナル裁判事件ハ皆之
ト相談シタルカ如シ從來法務衙門ニ於テ大隈君又ハ
陸氏ニ關係スル深キ取調ノ際ハ批官皆危懼シ懷キ之
ヲ避クルモノ多カリシト張參議ハ獨難局ニ當リ我領事
ノ立會ヲ得テ取調シ為セシ人物ナリシカ其後同人ハ
收賄ノ評判高キニ因リ警務廳ニテ擢領ソベシ計ハ
端緒ヲ得タルニ付本官ハ内務法務ノ兩大臣ニ向ヒ
相當ノ心算シ踐シテ敢テ取調シ為ス可シト志
告シタルニ拘ハラス徐大臣ハ敢テ甘霖ヲ垂實セス
直ニ其説諭ニ服セス徐大臣ニ對シ却テ不敬
ノ言ヲ漏シ若シ收賄ノ嫌疑アラハ法庭ニ於テ取調
シ受ケタシト申幕リタルニ付朴徐兩大臣モ幾ント其

在朝鮮國日本公使館

MT

1615

1506

MT

1615

1505

處分て不惑しタリ
トミタリト云フテ切リて西大臣
又設けしモノアリ
リシ頃ニ剛強ニシテ稍々事理を通じ殊ニ明律ニ精
シ裁判官トシテハ難得人物ノミナラス收賄事實ノ
有無不明瞭ナリトノ事ニ付徐朴西大臣ト内談シ遂
ニ同人シテ不敬ノ辭ヲ謝セシメ同ニ仍リ法務ヲ議
シテ使用スルヲ相成リて共此一事モ裁分カホ新四
西派ノ分裂ヲ助ケタルモノ也又之レト略ホ同時ニ
政府ハ慶尚道鎮撫使李亨夏ノ報告ヲ輕信シ總
理内務度支ノ三大臣ヨリ奏上リ經テ曰ク内某ッ邑
ノ租稅シ免シタル官報ニ相見ハ候ニ付本官ヨリ斯
ク一官員ノ報告ヲ信シ重大ノ租稅シ減免スルハ不都
合ナルノミナラス嚮キニ度支大臣ト約束シタル財以上
ノ諸事本官ノ意見ヲ聽ク可シトノ趣意ニ背
クモノナリト云テ右三大臣ニ詰問ノ書面ヲ送り候處右
奏上ハ三大臣ノ名ヲ以テシタルモ其實内務大臣ノ同
意ヲ待タスシテ奏上リ遂ニケタルヲあきらめ其法ニ新
順ニ向テ曰ク汝等攻撃スル一ノ材料ヲ與ヘタリ
右ノ如ク新四西派軋轉ノ熱度漸クお高リ豫ニ陽ニ
互相擠排セントスル氣焰熾盛ナルニ付二月八日本官
議政院ニ赴キ各大臣列席ノ前ニ於テ三大臣
處務ノ不都合ヲ舉ケテ之ヲ咎責し且ツ今日感
歩艱難ノ時ニ當リ新旧各々黨ヲ立テ相軋轉ス
ルハ當初ノ誓約ニ背キ國家ヲ以テ已カ任ト為ス
國務大臣ノ心得ト思ハレズ此際須ラク一致協和シ
テ國事ヲ從フ可シトノ趣意ヲ以テ痛ク攻撃シ加

在朝鮮國日本公使館

MT

1615

1508

MT

1615

1507

ハタル處新派ノ人々何可感シタリケレ曰十日朴内務大臣ノ發議ニ各大臣皆之同意國王ニ向テ辭表ヲ奉呈スル運ト相成リ申テ此時新派ノ内意ハ内閣總辭職シテサバ國王ヨリ必ス本官ヲ召シテ御下問可シ然ルトキハ本官ハ新派ノ肩ヲ持ツニ相違ナケレハ次期ノ内閣ハ新派ノ人々ニシテ組織スルヲ得可シトノ意思シ画キ回派ノ人々ハ亦内閣總辭職シ以テ本官ノ内意ニ出テタリト誤リテ遂ニ辭表奉呈ニ一致スルニ至レリト御ケリ

翌十二日午後本官ハ國王ノ御招キニ應シ於内閣處各大臣相府ニ相接見リテ甘本官ハ曰ニ向テ痛ク總辭職ノ不心得ナル所以ヲ説テ之ヲ責メ尋テ謁見ニ處國王ヨリ内閣各大臣一同辭表ヲ奉呈スヘキ様子ニ付曰何可ス可キヤトノ御下問有之レニ付本官ハ右ニ上奏ハ御採用相成リテハ宜シカラス依テ陛下ノ恩召リ以テ之ヲ年々ラレ猶ホ本件ニ付總理大臣シテ本官ニ就キ相談スル様御前相成リテ可駐云々

委細二月十二日内閣見始末筆記奏答ニ及ニ處翌十三日總理大臣金宗集來館ニ付内閣ニ於テ辭職相議ニ至リタル觀末熟ト相尋ネ之ニ依テ曰發議ノ新派即朴亦孝氏ノ口ヨリ出テタルヲ并ニ總理大臣モ全ク誤リシ居リテ事確ト相成リテニ付翌十四日ハ新派ノ二大臣亦朴亦孝徐光範及ニ署理大臣金嘉鎮ノ三氏ヲ招キ甘不心得シ責メ且ツ曰今本家多難ノ際皆同一致シテ甘高ニ當ラサル可カラサル旨嚴密忠告致テ處曰三氏ハ聊カ抗論シ試ミタルモ結構本官シ

在朝鮮國日本公使館

MT

1615

1510

MT

1615

1509

外務省
文書
第...

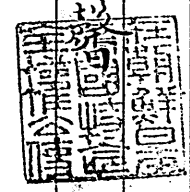
忠告ニ從フ可キ旨申出テ不レテ翌十四日、總理外務度
支軍務ノ四大臣シ相招キテ處總理外務軍務ノ三大臣
來館シテ素ヨリ本官ノ忠告ニ異議ナキモ獨度支
大臣ハ疾ト稱シテ來會セズ門シ閉テ客ヲ謝シ辭職ノ
決心シ相示シ居ル趣、致傳聞下ニ付總理外務兩大臣
ニ托シテ同大臣ノ來館ヲ促シテ處翌十六日午後來館
ニ付本官ヨリ目下王家多難ノ際ニ當テ重責ヲ擔
フ要務大臣ハ容易ニ其職ヲ辭ス可カラズ右ハ客年
冬、各大臣ノ相約シタル中、確東不撓不屈ノ心掛、百難而
力行不已并ニ一心設誓、誓願ヲ正志身扶、必ホノ
誓言ニ違フスル旨説明シテ嚴密相詰リテ處同大臣モ
遂ニ其決心ヲ繼シ本官ノ忠告ニ從フト相成申テ右
ノ如ク新田兩派ノ重ナル大臣ハ一日本官ノ忠告ニ從フ

在朝鮮國日本公使館

可キ旨申出テタリト雖モ猶ホ新派ノ諸大臣ハ果シテ改心
シタルヤ否甚ク被疑下ニ付、齋藤杉村ホシ派シテ裏面
ヨリ之ヲ説カシメタル後、同十八日午後再ニ林、森、三、大臣并金
署理大臣シ招キ更ニ忠告シ加ヘテ上其決心ヲ相尋、亦ハ
處右ニ氏モ愈々本官ノ忠告ニ服シ、四派諸大臣ト將來
一致協力シテ國事ニ從フ可キ旨、確答ニ及ヒテ、并夫ニテ
總辭職ノ議相止ミ、内務ノ折合、曰ニ復シ申テ依テ、延
引別紙相添テ事情及内報也

明治二十八年五月一日

特命全權公使前井上
外務大臣子爵陸奥宗光殿



MT 1615 1512

MT 1615 1511

忠告ニ從フ可キ旨申出テ不_レ習_二十四日_一總理外務度
 支軍務ノ四大臣ヲ相招キテ處總理外務軍務ノ三大臣
 末館シテ素ヨリ本官ノ忠告ニ異議ナキモ獨度支
 大臣ハ疾_レ稱シテ來會セズ門_二ヲ閉_一テ答_レ謝シ辭職ノ
 決心ヲ相示シ居ル趣致傳聞_二テ付總理外務兩大臣
 ニ托シテ曰大臣ノ來館_二ヲ促_一シテ處翌_二十六日_一午後來館
 ニ付本官ヨリ_二目下玉家多難_一際ニ當_レテ責_二ヲ擔_一
 フ玉務大臣ハ容易ニ其職ヲ辭ス可カラス右ハ客年
 冬各大臣ノ相約シタル中確_レ東不撓不屈心排_二百難_一而
 力行不已并ニ_二一心設誓_一屢_レ潔守正志身扶_二玉ホ_一
 誓言ニ韋_二背スル旨_一説明シテ嚴_レ出_二相詰_一リテ處曰大臣モ
 遂ニ其決心ヲ繼_二シ本官ノ忠告ニ從_一フ_二ト相成_一申_二テ右
 ノ如_レ新_二西_一派ノ重ナル大臣ハ_二曰本官ノ忠告ニ從_一フ

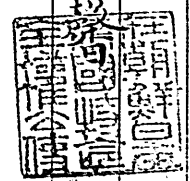
在朝鮮國日本公使館

可キ旨申出_二テタリト雖_一猶_レ未_レ新派ノ諸大臣ハ果シテ改心
 シタルヤ否甚_レ被疑_二テ付齋藤_一杉村ホ_二シ派_一シテ裏面
 ヲリ_二之ヲ説_一カシメタル後曰十八日午後再_レニ林_二徐_一ニ大臣并金
 署理大臣ヲ招キ更ニ忠告ヲ加ヘテ上_二其決心_一ヲ相尋_二テ
 處右ニ氏モ愈_レ々本官ノ忠告ニ服_二シ曰派_一諸大臣ト將來
 一致協力シテ國事ニ從_二フ可キ旨_一確答ニ及ヒテ_二付夫_一ニテ

別紙後便ニ差_レ送_二テ

外ノ折合曰_二復_一シ申_二テ依_レテ下_一延
 内報_二也

特命全權公使齋藤井上
 外務大臣子爵陸奥宗光殿



MT

1615

1512

MT

1615

1511

増家五号少少

第廿三号

宣統元年四月十七日接

主官 政務局

本署

通商局

大臣

閣下

次官

二月廿五日謁見始末筆記抄

本使 入謁例ニ據リ寒暄ヲ叙ヘ了ツテ宮内大臣等退出ス

本使 先般内閣大臣総辭職ノ儀興リシ已末本使ハ新旧大臣ノ間ニ處シ調定方取計ノ未漸ク協和ノ又局ヲ告グルニ至リタリ依テ今日ハ存ニ關シト通りノ顛末ヲ奏上致スベシ

大君主 諾

本使 ハ調定ノ第一着手トシテ内務省法務金署理工務ヲ裁館ニ召キ其辭職ノ提議ヲ為スニ至ル理由ヲ問答致セリ

其問答ノ大概ハ如左

内務 昨今ノ如キ内閣諸大臣ノ間柄折角

在朝鮮國日本公使館

惡シク相和ラズ様ニテハ改革事業ニ到底好結果ヲ見ル能ハサルベシト思ハル故ニ寧ろ日本大臣等幾人ハ現職ヲ去リ他ノ一派ヲシテ主義同シキ人政府ニ立ツラ共ニ國務ニ從事セバ部内ノ一致結合ヲ得ルノ便宜ナルベケレバ却テ國家ノ爲メ至幸ト云フベシ是レ本大臣等ガ姑ク退ヒテ徐ニ其成績如何ヲ傍觀セント欲スル所以ナリ

本使

貴大臣等辭職ノ意ハ姑ク之レヲ可ナリトセン而シテ其善後策即チ其後任者タル

ベキモノハ如何果シテ適當ニ満足ナル人物ヲ獲ベキ見込アリヤ本使ノ所見ヲ以テスレバ貴國人ニシテ而カモ經綸ノ大才ヲ抱キテ國家ノ杞

MT

1615

1514

MT

1615

1513

増家五号付少

第廿二号

宣統元年四月十七日接獲

通商局

主官 政務局

大臣

本使

入謁例ニ據リ

寒暄ヲ叙ヘ

ツテ

宮内大臣

ハ

興リ

シ

本

計

今日ハ右ニ

大官

大君主

ハ

調定ノ

第一着

手トシテ

本内務省

法

務金署

理工務ヲ

我館ニ

召キ其

辭職ノ

為スニ

至ル理

由ヲ

問答致

セリ

其回答

大概ハ

如左

本内務

省昨今

ノ如キ

内閣諸

大臣ノ

間柄

折台

在朝鮮

國日本

公使館

惡シク

和ラ

欠ク

様ニテ

ハ

改革

事業

モ

到底

好結果

ヲ見ル

能ハ

ザルベ

シト

思ハ

ル故ニ

寧日本

大

臣等

幾人ハ

現職ヲ

去リ

他ノ

一派

ヲ

主

義

同

シキ

人

政府

ニ

立

ラ

共ニ

國

務ニ

従

事

ニ

ハ

部

内ノ

一致

結

合ヲ

得ル

ノ

便

宜

アル

ベ

キ

却

家ノ

為

至

幸

ト

云

フ

ベ

シ

是

レ

本

大臣

等

カ

結

ク

退

ヒ

テ

徐

ニ

其

成

績

如何

ヲ

傍

觀

セ

ント

欲

ス

ル

所

以

ナ

本使

貴

大臣

等

辭

職

ノ

意

ハ

結

ク

之

リト

セン

而

シ

テ

其

善

後

策

即

テ

其

後

者

タ

ル

ベ

キ

モ

ハ

如

何

果

シ

テ

適

當

ニ

満

足

ナル

人

物

ヲ

獲

ベ

キ

見

ル

ア

リ

ヤ

本

使

ノ

所

見

ラ

以

テ

ス

レ

バ

貴

國

人

ニ

シ

テ

而

カ

MT

1615

1514

MT

1615

1513

REEL No. 1-0714

0456

議論相衝突

機ニ處スベキ人物ハ八道ノ野ニ鐘太鼓ヲ敲キテ
尋廻スルモ恐ラク之ヲ得ルニ難カラニ若シ諸君
コレヲ此ノ人物ナラバ同旨スモノアラバ試ミ之ヲ
聞カシメ大臣點然答ル所ナシ其人材ノ容易ニ
得ベカラザルヲ之レ思ハズシテ一朝ノ憤リニ國家
ノ重キヲ忘レ退隱セシムルカ如キハ怪モ見戲ニ
類スルモノト云ハザルベカラズ
朴内務等 辭職ノ原因ハ前段ノ如ク独リ自他
概知シ難キノミナラズ聞ク處ニ據レハ國家ナル某
々大臣ハ大院君ト暗々裏ニ結ヒシ密ニ我々ヲ陷
擠セシトスルモノ如シ齊シク新政府ニ立ツモノニ
シテ其レ如此裏面ニ隱匿的手段ノ伏在スルハ
リトセバ到底是等ノ一派ト終始ヲ共ニスル能ハ
ズ
在朝鮮國日本公使館
カルハ必然結局彼レ存スルカ我レ亡ルカ早晚一
波瀾ヲ生スルラ免カザルベシ而シテ吾々ノ最
モ釋然タル能ハザルハ内閣ノ公席ニ於テ相見ル
々彼所謂老成者ト唱フル連中ハ表面和氣
溫容ニシテ口角沫ヲ生シテ相争フガ如キト曾
々之レアラサレバ外見上主義一致スルカト思ハル
モ其裏面ニ至リテハ大ニ之ト相反シ實ニ氷炭相容
レザルノ言行多ク顯ルハアリ
本使 諸君爲リ其レ曉ラサルノ甚タシキヤ新
旧大臣ノ一致協和ハ却テ或ル者ノ爲メニ忌ミ其
離間者ハ常ニ鼻息ヲ窺ヒツアルヲ今ヤ
又半ハ其術中ニ陥リツアルコトヲ本使カ毎々
諸君ニ忠告セシ如ク所謂疑心暗鬼ノ爲メニ

MT

1615

1516

MT

1615

1515

誤マルコト勿レト蓋シ之ヲ謂モナリ此頃大院
君ハ切ニ來訪者ニ向ツテ總理外務度支軍
務ノ四大臣ハ昨午事變後予ト同腹ヨシテ
今日ト臣比互ニ氣脈ヲ通シ予カ余令トナレバ
一モ二モナク服従シテ背カレモノナリト得意
ニ吹聴セリト惟フニ是レ大院君カ今日巧ニ新旧
大臣ノ間ニ風波ヲ起サシメ竟ニ兩党派ヲシテ
鬭争ノ余リ一混雜ヲ政府内ニ起サシメント
ノ魂膽ニ出タルモノニシテ諸君ハ之レヲ是レ曉
ラズンバ終ニ其術中ニ陷ランノミ宣深ク戒
心セサルベケンヤ云々

在朝鮮國日本公使館

本使 何レノ國ト臣比國政改革等ノ行ハル時代
ニアラハ多ク山見者ヲ生スハ數ノ免カレハ所
ナリ其例ヲ學ブクニバ我國維新以來先キニハ
廣澤參議アリ後ニ大久保參議アリ比々皆
然リ近クハ文明國ノ首班タル佛國ニ於テサレモ
其大統領ノ手ニ榮サレタルカ如キ深ク怖ラニ
足ラザルナリ新國務大臣トシテ國家ト存セテ
共ニタルモノ先テ恐レテ何事カ成ルベキ宜ミク
肚胸ヲ据ヘ死テ甘シ國ニ殉スルノ覺悟ナカルハ
カラス又タ此間ノ衝突ハ年号ヲ新ニ起スベ
シ迎恩閣慕華館ヲ破毀ミテ清國崇拝
ノ念ヲ割斷スベシトハ新大臣ノ主張シタル所
ナリガ如シ本使ハ最モヨリ此議ニ感服スル能ハ

三

MT

1615

1518

MT

1615

1517

等

不何トナレバ虚ヲ去リテ實ヲ務ムベシト本使力
盡シテ貴國ノ爲ニ忠告スル所ナリ年号ヲ作り
家屋ヲ毀タレバテ何程カ人心ニ感動ヲ與
フベキゾ所謂曰大臣連中ナルモノガ此輩見戲
ニ類スル庸置ヲ拒否シタルハ強ク無理トセザル
ナリ之ヲ要スルニ新大臣ハ兎角何事モ輕忽ニ
失ニ極端ニ本使スルノ嫌ナキ能ハス
本使ハ又我日本力維新以來如何ニ刻苦經營セ
シヤ付誰ヲ援キ例ヲ舉ケ一糸ノ歴史話ヲ爲シ
朴氏等が意見ノ接合セザラテ不耐忍ニ直
ニ職ヲ退カントスルガ如キハ國家ニ忠誠ナル所以
ニアラズト談キ何ニ兎モアレ大臣總辭職ノ原
因ハ他ノ離間策ノ爲ニ疑心暗鬼ヲ生シタルモ
ト思ハル故ニ若シ爲之辭職ヲ決行セントスルカ如
キハ國家ヲ誤ルモノト云フザルヲ得公
朴氏等 成程左様ニハレバ一應道理ナキニア
ラズ然レモ由シ一歩ヲ進メテ假ニ吾々が疑惑ヲ
解キ和衷協同國政ノ改良ニ從事セントセシカ
果シテ彼ノ老人株ナル大臣タルモノ吾等ト同
情ヲ表シ釋然事ヲ共ニスヘキヤ否ヤハ頗ル
疑フヘシ云々
本使 他ノ疑心ヲ解クト否トハ暫ク措キ先ツ
以テ自己ノ疑惑ヨリ去リノ考ヲ爲スコソ必要ナ
ルベシ昔々當國人ノ習慣ヲ察スルニ世道ナルモ
カ國政ヲ專握シタル時代ニアツテハ離間策
ナルモノが大ニ流行シ是ヲ以テ唯一ノ處世手段ト

在朝鮮國日本公使館

四

MT 1615 1520

MT 1615 1519

為シタルが如し縦へバ或ル者ハ自家ノ位地ヲボ
 ル爲シ之ヲ以テ他ヲ陷擄シ又或ル者ハ他人ノ爲
 ソ之ヲ賣リ廻ツテ陰ニ助成スル等事々物々
 此筆法ヲ用ヒテ互ニ相爭鬭スルノ有様ナリ
 必竟スルニ離間ナルモガ買ハレバコソ賣リ廻
 ルモノカアルナリ縦へハ此時本使ハ之ヲ一箇ヲ執
 リ此等ノチヲ賣チガアレバコソ賣手ノ所ナリ
 リ若シ然ラスニテ何程賣リ廻ラントスルモ之レヲ
 買フ人ナケレバ賣ルモノ何ト候ハシ之レヲ放擲シ
 テ顔ミガルニ至ランノミ之ヲ然ラレバ諸君モ
 向後決シテ此等ノ習慣ノ爲メ此ノ離間策ノ
 爲メ誤ラレサル様即チ何程離間シ擄奪キ行
 クモノアリトスルモ一切頓着セサルトセバ終ニ斯
 在朝鮮國日本公使館

此弊害ヲ一掃スルニ至ランノミト醉々乎トシテ
 誤キ去リ誤キ来ルニ及ンテ朴徐金ノ三氏ハ
 曰ク兎角此國ノ事ハ本使ノ調定ニ任シ我
 ヲハ疑惑ヲ去リ正ニ就キ事心國務ニ従事
 スベシトノ事ナリ
 於是再ヒ金総理會升務魚度支趙軍務ヲ
 罷キ(但し魚度支ハ病氣ヲ称シテ不來依テ翌日
 之ヲ招キタリ)本使ハ畧前段ニ拘ヒキ口調ヲ以テ既
 破スル所アリントシタルモ此四大臣ハ最初辭
 職等ノ考ヘモナカリシニ朴内務ハ突如トシテ辭
 職ノ上上疏ヲ爲サシメ提議シタリト云ヘリ其
 理由トモテ同大臣ハ昨年六月以後新ニ組織セ
 ラレタル政府ナルモノガ改革上一事ノ能ク決行

MT

1615

1522

MT

1615

1521

レテ寸効ヲ奏シタルモノナシ斯クテハ我々ハ上ハ大臣
 王陛下ノ聖意ヲ奉答スル能ハズ下ハ國民ノ輿望
 ト相及スルモノナレバ宜シク自ラ答リテ總辭職ヲ
 為スラ可トスベシ若シ諸大臣ニ於テ愚議アラバ本
 大臣独リ先以上疏シテ印授ヲ解クベシ云々夫レ
 内相ノ就職僅ニ二月ニ過キス而シテ其職責
 ノ舉ラサルヲ歎スルコト此ノ如シ我々ノ如キハ昨年
 六月中内閣組織以來引續キ重職ニアルノ身
 ナレバ自カラ曠日ノ多キヲ知ルベシ殊ニ謂ラク此
 提議ノ起ル恐ラク内相自身一己ノ意見ニモア
 ラサルベシ大臣王陛下ノ貴方使トモ熟議ニ成リタル
 ナラント毫モ怪ム所アラズシテ直ニ之ニ同意シ
 表シ有レク上疏退職ヲ爲スベシトノ議ニ決セ
 レナリ將又謂ラク朴氏ノ提議ニミテ深キ魂膽ア
 リトモ勿論善後策ナドニ至ツラモ疾ニ成案アル
 ルベシ果シテ然ラバ是ゾ却テ國家ノ爲ノ至幸
 ト云フベシ本大臣等ハ寧ロ喜シテ之ニ賛同ス
 ルモノナリ何トナレバ嘗テ聲言スル如ク吾々ハ決シ
 テ官職ニ戀ヤスルガ故ニ此ノ重職ニアルヲ好ム
 モノニアラスモバト云フテ自家ノ力善ク此難
 局ヲ匡濟スベキヤト云ハハ不才不能敢テ當ラ
 ズト云フノ外ナキモ望ミテ國家ノ危モリ傍觀スルハ
 忍ヒサル所故ニ可及丈ノ心カヲ振ツテ局ニ當
 ラント決心シタルモノナリ云々上本使之二對ニテ諸
 大臣ノ辭職沙汰ハ是レ全ク相互ノ疑感ヨリ
 生シ他ノ離間策ニ陷ラントスルモノナリ貴大臣ス

在朝鮮國日本公使館

MT

1615 1524

MT

1615 1523

う謂うく本使ニモ然る辭職ハ同意ノ上ノ事ナ
 るベシ云々是亦一ノ疑惑心ニ外ナラザリ本使ハ
 初メニ揚言セシ如ク不偏不党慮心平気ヲ以テ諸
 大臣トノ間ニ均一ノ交際ヲ保シタルモノニシテ
 密シク彼レニ厚ク此ニ薄キノ理アラシヤ其レ之ヲ
 思ハズシテ本使ニ向テ一言ノ相談ナリ直ニ
 耶推ラ下シテ總辭職ヲ爲スベシトハ餘リノ輕率
 ナルハヤル可カラズ何ントナレバ本使自下貴國國
 債爲ノ如何ニ苦心集慮シツアルカ諸大臣ト
 臣民必ス御衆知ノ事ナラシ然レニ政府部内
 ニ起リタル今者ノ风波ハ如何ニ本件ニ向ツテ妨
 害ヲ興フルカ京城ニ滞在スル我新聞通信者
 ハ電報ヲ發シテ此出来ゴトヲ通報セリ最
 早總辭職ノ噂ハ我國ノ新聞紙上ニ掲載
 セラレ忽チ議論ハ噴々ナリ我政府ハ謂フク月
 鮮ノ國事變更ニ當テシト我人民ハ謂フク事
 已ニ此朝鮮前途案スベシト之ヲ聞クモノ恐
 ラクハ朝鮮政府ハ不安心ナリ言スベカラズトノ
 感情ヲ起サハルモノハナカレベシ果シテ然ラバ本
 使カ貴國國債ノ爲メ折角幾十回ノ書翰
 遣使ヲ發シタルを空シク水泡ニ歸スベシ本使ハ
 固ヨリ朝鮮ノ臣民ニアラス又タ朝鮮ニ盡スベキ
 義務モ存セザルニ由ル然リ然レニ諸君ハ
 天ニ地ニ相鮮ノ國家ヲ負ヒ之ト興廢ヲ
 共ニスベキ而カモ國務大臣ノ地位ニアリテガ
 偶國政ノ少シク緒ヲ執カントスル片端カラ破

在朝鮮國日本公使館

MT

1615

1526

MT

1615

1525

懷せしトスルカ如キ事動カラストハ如何ニ國家
 不備切否都テ國家ヲミテ益否運ニ導クモ
 ノニアラズシテ何ソヤ諸君ハ往ニ執考セヨ
 硝煙重ク機ニ砲聲耳ニ轟キ劍光・瞬
 タ射ルニアラガレバ幸タ以テ國家ノ危亡ヲ為サ
 ビルカ何ソ時局ニ通セザルノ甚シキヤ世ニ禍機
 ノ伏スル時節ヨリ恐ルベキモノハアズ是レ其ノ
 何ノ時何ノ處ニ發動スルヤ豫期スヘカラ
 ガレバナリ貴國ノ事甚タ之ニ類スルモノ有リ
 若シ夫レ今ノ時機ニ於テ國政改新セラレシ
 ラ猶ホ旧時ノ觀ノ如クナラシガ其ノモヒサラシユ
 トヲ欲スルモ豈得ケンヤ
 金總理等曰ク其レ之ヲ知ラザルニアラズト金氏
 在朝鮮國日本公使館
 君ト世間流傳スルハキ候補者スラ已ニ指名セ
 ラレ善後策モ充分備ハルモノトセバ強テ我々
 カ官職ニ惠着シ任地ヲ固持セシトスルカ如キハ
 潔トセザル所ナレバナリ朴泳存總理大臣ニ
 其他二三ノ新任大臣ヲ出スベシトノ評判ヲ
 持スモノナラシカ
 本使 新選ニ候補者ナリト世間ニ傳フルモ
 ノ姓名ハ折モ何ノナルヤ
 總理答 閣下達沈相黨李載純閣下
 喚等諸氏ハ即チ大臣候補者中ニナリト
 本使 予モ已ニ之ヲ聞カザルニアラス然レモ
 殊ク信ヲ増カサリシ何トナレバ是レ坊間傳フル所

MT

1615

1528

MT

1615

1527

ノ臆談ニシテ其出處ノ程モ略聞ハミシバナリ若
シ夫諸大臣ニシテ是等ノ巻説ヲ信シ終始想
像ヲ逞クシ彼我ヲ害スルニ意アリ彼我レヲ
惡モリトノ意ヲ挾シテ胸中ニ有ニ疑團ノ纏綿
スルアラバ政府部内ハ殆レト波瀾ノ絶間ナカ
ルベシ宜シク大臣タルモノ卓絶ノ意見ヲ持シ容
易ニ他ノ離間策ニ陷ラガル様又互ニ猜嫌ノ
念ヲ去リ公心秉發一國國務ニ盡瘁セラル
ノ希望マシトノ意ヲ以テ忠告ニ及ヒタル未終
理始メ三大臣ニモ大ニ曉ル所アリテ此ニ新旧
大臣間ノ風波モ一ト先ツ調和ニ歸ス由ニ
相提攜スミテ從前ノ如ク國務ヲ執ルコトハ
相成リタリ之ニ因テ一言陛下ノ御注意込テ
奏上シ置キタキハ過日陛下ノ御前ニ横ハル
卓子ヲ指シ此諭ヲ列キタル如ク陛下ヲ諸大
臣ニ對セラルニ先分公平ニ彼此厚薄ノ
區別ナキ様又國務上ニ關スル御證聞ニハ
總理大臣ナリ又ハ必ラス其主王大臣ヲ直ニ
御時出相成テ御下問相成度殊ニ出来得
ベケンカ過日モ奏シタル如ク中宮陛下ニ大
臣中誰某ノ區別ナク齊ニシテ御引見相成
ラレテ是レ國務大臣タルモノハ他ノ官吏ト異
ナリテ一國ノ政務ヲ司トリ國家ト休戚ヲ共
ニスルモノナレバ此ハ特別ニ兩陛下ノ厚遇
ヲ加ヘラレザルベカラス
大君主 政府部内ニ於ケル始終ノ詳詁朕具

在朝鮮國日本公使館

MT

1615

1530

MT

1615

1529

中宮ニモ

ニ之ヲ悉ク其ニ就テモ御力苦心の程察スル
ニ余アリ過日金總理力一貴族ニ往キタル日
道官ニタルヲ聯ハ新旧大臣間ノ調和ハ如何
ヤトノ間ヒヲ起シタルニ同大臣ハ其儀ハ何ナリ
片付クベキ見込ナレ始終氣拂リナルハ清
國ニ於ケル日後ノ交渉ナリ云々兎角同大臣力
薩摩志ニ能ハサルハ事大ノ旧憂ナラシム
訪大臣ニ對テ對馬ノ事ハ御力屢々忠告
ス所朕深ク心ニ銘シ志ガルヘシ又中宮ヘ
謁見ノ事ハ是ト至氏金嘉鎮趙義順
安嗣壽ハ時々許サレ御先範ノ如キハ亦氏
祖先ノ血縁アリテ是亦時々拝謁ヲ允サレ
コナリ

在朝鮮國日本公使館

本使 今中宮陛下ニ於テ各大臣ニ齊シク謁
見ヲ賜フイラ允サレト望ムモノハ即テ政務上
ニ関シテハ勿論中宮陛下ノ御容儀可相成筋
ニラサル儀ハ業ニ已ニ述べ述シテ残ヌ所ナシ
名ハ國政ニ関スル場合ニアラサルハ御得心ナ
ルベシ唯々儀式日或ハ時候ノ所見舞等ニ
當ツテ大君主陛下ニ参賀員ヲ爲ス折ニ各大
臣ヲ其謁見席ニ一同召見セラルシコトヲ都
テノ意ニ外ナラス
大君主 然リ左モアルヘシ

MT 1615 1532

MT 1615 1531

大臣

次官

35

梁家元

受第三九五號

內閣通知

光緒二十三年五月二十三日
政務局

市北

秘書課

蘇一武

機發第四，瓊

大溪書畫鑒藏總覽

大隅表ノ孫ノ宗正卿才媛鑑式が去月十日

夜突水沽務衙門權設裁判所拘

事大ニ世向ノ目目ヲ惹ク

二多しり
折
家年米大
贈君李
峻

鑛ノ急ナ計畫アリコトハ多少事五人

ノ向ニ風説有之モ先分ハ河内無之ナリ

其心助ニ於テモ沈黙ニ付ニ来リタルヲ爲

本前多積一冊下旬日龍筆上者

本年陰曆一四下自出日敵爭去者
 丙午二月五日殺也亦並四下ノ山

内注二大五ノ暗製セト企リトノ財

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

來是云年連也高宗柱金不美

在朝鮮國日本公使館

韓新錫 田東錫 曹渚 紀縉 縉 就

此等ノ者ハ博士トシテ大隈君李煥

信門出入已矣

議ヲ決スルヲ今其計畫ニ大畧ヲ

能々如左

爲一
家使少平壤
派之清兵ノ大學

下下下下

東學徒ヲ勵ニテ養成ス

卷二 東學錄 卷二 東學錄

以上第一第二ノ手後、
第三ノ日兵ヲ夾

三
以上第一節二ノ至
轉手ニ之ニシ境外ニ
作ル事

卷之四
開元
外
分
即
金
集
金

為四
陳仲實
人
物
則金
宏
身
金

鶴羽金嘉鑄安順李一超義洪

NT

1615

1534

MIT

1615

1533

金宗漢命去濟李久用等ヲ暗殺
スル事

才五 玉王王妃世子ヲ暗殺シ李俊鎔ヲシ

王位ニ即ヤル事

才六 李俊鎔ニ與リ切實ナル者并ニ其少
ヲ用ヒテ新政府ヲ組織スル事

以上才一ノ計畫ハ既ニ行ハレタル形跡故
ニ其秘密使トシテ平壤ニ赴キ金宗漢源
李俊鎔林仁洙鄭寅九金炯穆等是レ
才是等ノ徒ハ去宋陰曆七月十六日龍
山ヨリ船ヲ僦シ水路延慶ニ出テ同七月廿
一日平壤ニ入り監司ニ密告シ安時ニ李
俊鎔ノ如キハ現ニ汝將河貴ニ面談

在朝鮮國日本公使館

ル所ヲ了スルニシテ其後漢兵一々ニ平壤
ニ大敗セシヨリ是等ノ計畫ハ全ク潰
レ散リ少シノ李俊鎔等一ニ味ヲシテ阻表
セシソカニモノメシ

才二ノ計畫ハ陰曆八月下旬頃ヲ漸次
着手セシケルモノナリ當時金羅慶尙
ノ東徒稍一用兵ノミナリシモノナリ李
健永朴東鎮朴世綱等ニ東徒徒征
討ノ名ヲ授ケ表面東徒徒征撫ヲ稱シ
其實密告ヲ密告シテ合切ニ其機動
ヲ行スルニシテ其秘密ナルモノナリ

即遣三南召募使リリノ密告ヲ番等
自先王朝化中遺民不忘先王之恩德

MT

1615

1536

MT

1615

1535

鐫

而至今尚存。在相者盡附彼。裏内無一人相議。榮々獨坐。仰天號哭而已。方今倭寇犯國禍及宗社。命在朝夕。事機如此。爾若不来。迫致禍患。是若奈何。以此教示。

又前校理宋廷慶之番書三通。ヲ授。忠清道ノ士。處家名族。之南。之東。學。光。煥。勳ノ事。ヲ以テシ。以。河。任。宋。大。臣。ノ。子。判。事。宋。秉。瑞。連。山。任。校。理。金。大。五。孫。教。官。金。永。吉。魚。口。任。進。士。軍。器。臣。ノ。三。人。主。計。ス。又。李。容。鍾。ノ。慶。尚。道。ニ。送。リ。劉。仁。福。東。鏡。ヲ。贈。集。事。也。右。五。名。ノ。中。朴。東。鏡。ハ。忠。清。道。ニ。於。テ。巨。魁。任。其。卑。徐。長。玉。ノ。朴。世。綏。ハ。全。羅。道。ニ。於。テ。

在朝鮮國日本公使館

巨魁金瑋準。宋喜玉。ト。相。合。ニ。シ。打。出。シ。後。事。多。於。金。三。南。ノ。東。鏡。齊。々。皆。起。シ。金。瑋。準。金。海。軍。又。分。易。補。ス。ハ。全。羅。道。ニ。在。任。法。軒。ハ。忠。清。道。ニ。起。リ。九。月。上。旬。ニ。及。テ。ハ。其。勢。益。熾。楸。ノ。名。ヲ。號。シ。劉。仁。福。官。軍。ヲ。破。リ。官。船。ヲ。斃。ス。多。軍。糧。以。器。ヲ。奪。シ。民。家。ヲ。燒。キ。財。物。ヲ。掠。シ。全。州。已。ニ。陥。リ。公。州。法。州。モ。次。ヲ。示。ス。危。カ。キ。ト。ス。公。孫。地。方。官。ノ。急。リ。報。ス。ニ。ハ。陸。路。遠。ク。人。ス。此。時。政。府。ハ。日。夜。六。ノ。カ。リ。借。リ。討。劉。ス。ト。決。シ。大。君。主。ノ。裁。可。シ。シ。マ。タ。公。孫。大。將。長。李。俊。鎭。等。力。ヲ。極。メ。テ。之。ヲ。救。拒。シ。テ。曰。ク。東。鏡。ハ。無。民。國。ト。均。ニ。シ。是。レ。本。心。ノ。忠。義。生。キ。今。年。一。度。主。義。ヲ。遂。ヘ。ト。以。此。軍。士。ノ。海。解。ス。ニ。シ。テ。以。テ。之。ハ。彼。必。ス。王。

MT

1615

1538

MT

1615

1537

上領ノ際見しむ王大王大段大父子が平安
 盟司より法將の内通し事柄ノ手こへアリテ
 此二件ハ極ラ同方法責スル好財利ハナリ
 然リ其時本官ノ論上見先要領ハ日朝兩
 王ハ已ニ同盟定約シ法正ニ對シ均シク
 交戦セノ地位ニ立ルハ不徳義ト定約事及ナリ
 シテ日本ニ敵セシムハ不徳義ト定約事及ナリ
 又東條ハ自ル兵力ヲ以テ鎮撫ニシテ能ハレ
 古シ政府ハ文ヲ貴シ武ヲ修リテ對
 外事ヲ際却シテ之ヲ教養スルハ表裏
 西國不事ノ事柄トシテアリ
 大段君太子俊鑑ハ深ク慙愧スル所ナリ
 屬事書信ニ就キ其不睦未ナリ
 在朝鮮國日本公使館
 以後ハ不睦時終ニ到ル待テ外重一部ノ
 津佐ヲ若スルニシテ姑ク其輩動ノ期ヲ緩
 ノ、勿レ以上一功ノ事案ハ連累者ノ供
 此方ハ不睦時終ニ到ル待テ外重一部ノ
 津佐ヲ若スルニシテ姑ク其輩動ノ期ヲ緩
 ノ、勿レ以上一功ノ事案ハ連累者ノ供
 此方ハ不睦時終ニ到ル待テ外重一部ノ
 津佐ヲ若スルニシテ姑ク其輩動ノ期ヲ緩
 ノ、勿レ以上一功ノ事案ハ連累者ノ供

MT

1615

1542

MT

1615

1541

新なる途ナキソ法務衙門ハ新捕成法ナ
 特にお法院ナモノヲ措ナ之コトヲ王族ノ関スル
 犯罪ノ裁判セシメテ法ヲ設ケ陸曆四月一日
 リ其案施行ナリ行々セリ此ハ大法院李俊
 ノ一派ハ前ニ於テ政府ノ獄事ヲ地ニシテ
 年々ノ已ニテ重セリトテ地ニシテ日本ニ赴
 々ニテ先王外務大臣ハ五ノ元出立ナリ
 直リ李俊ニ行ナリ李俊ハ使ヲ使フテ密ナリ
 此ハ李俊ハ政府ハ本件ノ露露ニシテ以来ハ是
 ノ對スルコト吹クハ冷淡ニシテ使ノ後定シ
 唯ナキハ使館焼失後事ハ物并ニ思思
 ノ使館ナキ事ヲ爲メ解板ヲ設ケテ容易ニ其
 赴任ニ同意セス此切ニ之リ露露ハ法ヲ執
 誠ナリ蓋シテ亦ハ慣例ナリ何人ハ其ハ差シ
 王位ヲ親臨スルコトヲ嘗てシテハ君臣ノ
 分トシテ其罪狀ヲ極論シ百ハ臣手ヲ出シ律
 ニ依リテ其罪狀ヲ極論シ君主ニシテ踏踏
 也日臣使ハ前ニ之ニ以テ之ニ例ナリ今
 李俊鑑比ノ事ニテ亦タ之ニト因様ノ手
 續ナリ後々ハ臣手ヲ出シ政府ハ度政改革
 ノ際ノ事トナリ或醜刑ヲ極シテトナリ
 其本臣ハ其極刑ナリ此ナリ事ノ不
 可ナリ勸告ニ於テ特にお法院ノ手ニ移シ
 正事ナリ此世間一般ノ批評ヲ受
 ケレハ其ミナリ
 此ハ李俊鑑比ハ此過策トシテ運轉シタリ

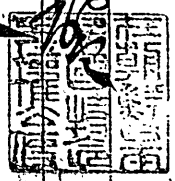
在朝鮮國日本公使館

MT 1615 1544

MT 1615 1543

ヲ助連ノ儀有テ本立ヨリ四全ヲ平限ト無
ニ代ヨリ科ナキ又一人ノ文道上ヨリ家系ハ
南ヲ多末十ニ感懐リ生シ黙止ト雖も場
合有テ一而ハ外却大也向テ成
ノ通一昔ノ醜ノ意多無之極忠告一而ハ
已ルノ如ク其趣旨ヲ以テ短同ニ大段ナ
ハ至極多ク

在歎末及報申之也
明治廿五年五月十日
特令公使由書并上報
外務大臣子爵陸奥宗光殿



在朝鮮國日本公使館

MT 1615 1549

copy

20

H. J. M's Legation
Soul. April 25th 1895.

Sir,

In pursuance of my note of the 22nd Inst. I have the honor to inform you that I have communicated with the Korean Government as the enclosed copy No. 1. respecting the subject of your communication of the 20th Inst. and obtained yesterday their reply as the enclosed copy No. 2. You will learn from the reply that the Korean Government entertain no apprehension in consequence of the arrest of Yeu-chun-yon, and also from the enclosed copy No. 3. the causes that have lead to the arrest of the said person.

I have the honor to be
Your obedient servant
(signed) E. Inouye-

Hon. J. M. B. Sill.
United States Minister Resident
and Consul General.

MT

1615 1550

REEL No. 1-0714

0475

Copy

MT

1615 2/152

at the time our Consul was in Hong Kong. J.M.'s Legation to
the effect of your letter of 22nd April 1952
which was received at the Legation on 24th April 1952

I am sorry to hear that you are
at present at the Legation and that you are
in the process of acknowledging receipt of your des-
patch of the 20th Inst. addressed to me on behalf
of yourself and your colleagues with reference to
the alleged political criticisms arising out of the
arrest of His Highness Yee-chun-yon and which,
in your view, may lead to a popular excite-
ment that may threaten the safety and wellbeing
of the subjects and citizens under your respectful
charge and asking my views on the situation
and the steps, if any, I should think advisable
to take at this juncture, I beg to state in reply
that a news of the said arrest of His Highness
Yee-chun-yon reached me the same day as it
did to you and that it has invited my attention
and that I have been since then watching the
turn that it may assume but up to this moment
it does not appear to me that the event has
yet reached a phase to enable me to predict
such grave consequences as represented in your
despatch and that my knowledge of the affair

Hon. J.M. B. Hill.

United States Minister Resident & Consul General

1651

at the
MT

Copy

MT

1615

1552

at this time our Consul General J. M. B. Hill is at the Legation in
Peking and is expected to return to the Legation on April 22, 1905.

I sincerely trust that the Government will be able to
at once take the necessary steps to prevent any further
disorder. In acknowledging receipt of your des-
patch of the 20th Inst. addressed to me on behalf
of yourself and your colleagues with reference to
the alleged political crisis arising out of the
arrest of His Highness Yee-chien-yon and which,
in your view, may lead to a popular excite-
ment that may threaten the safety and wellbeing
of the subjects and citizens under your respective
charge and asking my views on the situation
and the steps, if any, I should think advisable
to take at this juncture, I beg to state in reply
that a news of the said arrest of His Highness
Yee-chien-yon reached me the same day as it
did to you and that it has invited my attention
and that I have been since then watching the
turn that it may assume but up to this moment
it does not appear to me that the event has
yet reached a phase to enable me to predict
such grave consequences as represented in your
despatch and that my knowledge of the affair

Hon. J. M. B. Hill.

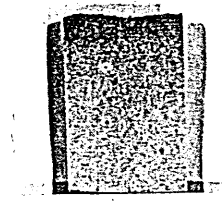
United States Minister Resident & Consul General

1551

at this

REEL No. 1-0714

0477



1615 1551 TM 4903

at this moment. I do not impress me with the necessity for convening a meeting of the Diplomatic body.

In the meantime it gives me pleasure to state here that I shall refer the matter to the Korean Government, who of course, might understand the situation best, and ascertain their views on it and communicate them to you at the earliest possible moment. I shall also have the honor to convey to your obedient servant the message and suggestions which I have received from the Japanese Government in relation to the matter. I shall also have the honor to convey to your obedient servant the message and suggestions which I have received from the Japanese Government in relation to the matter. I shall also have the honor to convey to your obedient servant the message and suggestions which I have received from the Japanese Government in relation to the matter.

MT

1615 1551

W. B. Hill

Handwritten vertical text on the left margin, possibly a date or reference number.

copy

MT

1615

1554

22

Legation of the United States
at Seoul Korea April 29 1895.

Your Excellency,
On behalf of myself and my
colleagues and at their request I beg to
refer to you, as Agent of the Diplomatic
Body with reference to the political crisis
which came to our knowledge yesterday.

It appears to us that the arrest of the
nephew of His Majesty the King is likely to give
rise to popular excitement which may de-
velop into serious consequences, threatening
the safety and well-being of the subjects
and citizens under our respective charge.

We should be glad to hear from you
either personally or by letter, what your views
on the situation may be, and what steps
if any, you with your superior knowledge of
local affairs, would think it wise to take
to allay

His Excellency
Count Inoue

H. I. J. Minister
Seoul.

3561

2181

TM

1861 2121 TM

to allay the popular disquiet and to insure
the safety of foreign life and property.

If you should think it desirable to
convene a meeting of the diplomatic body,
we shall be happy to obey your summons.

I have the honor to be
your obedient servant
(signed) John M. B. Sill

MT

1615

1553

REEL No. 1-0714

0480

乙字來文、意ハ此ニ在リ、以テ之

乙字

敬覆者頃接

貴來函內開頃准駐京美國公使來文內為李宗正卿被刺之愛人心震駭恐釀巨變即將其應如何設法安帖民情以保全外國人身命財產之處并或付諸列國使臣會議如何等事詢及本使一節本使接准之下伏查此次李宗正卿被刺之事實屬大獄故民心頗生驚怖本使亦有所聞則列國使臣趁時有處變之議固可以見其用意周到而至如我國則現在羈留人民最衆本使誠不能無憂慮矣為此備文咨會貴政府請煩查照未審貴政府所見以為何如現在民心疑懼竟無延釀巨變之虞耶

在朝鮮國日本公使館

本使等職責所關敢望貴政府即將其果有能期無虞之處迅速確覆實為殷盼更有懇者此案係屬貴宗室本使等本不欲強行推問惟貴政府若將案中之原委明晰見示是為望外之幸等因准此并譯示美使來柬均已閱悉查李宗正卿被刺之事原係法務衙門奉

勅

旨查究者也案情秘密民間不悉衷許頗致疑在數三日未漸復安靜必無他意外之慮矣至

詢及案中原告本大在末便言明而為釋疑慮畧具所聞附東另幅請煩貴伯爵公使核覽轉示美使可也肅覆順頌

MT

1615 1556

MT

1615 1555

台祺

金允植頓

我三月廿日

在朝鮮國日本公使館

MT

1615 1557

REEL No. 1-0714

0482

○名冊

我曆昨午十月初三日法務部辦金鶴司爲刺
容所殺一城驚動此
貴公使之所詳知也我政府方當改革政
治之時意外禍機先及於執務之臣若不
深究根因嚴杜後弊則國體隨壞不可復
爲是以我政府嚴飭警務廳使之調查該
犯至本年正月又有人欲謀害內法兩大臣
之說該廳尋緝暗捕可疑之人盤覈之際
轉露出金協辦之事據該犯所共轉
加層折竟至株連於李宗正卿及鎔招諱
緊重事朕 宗社不容掩真故於本月二
十四日政府大臣密奏我

在朝鮮國日本公使館

大君主陛下奉有
勅旨到該宗臣方在查問之中云此葉源
委大要如右重違 勅諭特此密佈

MT 1615 1559

MT 1615 1558

REEL No. 1-0714

0483

丁巳

敬啓者茲准我曆三月二十四日夜本國巡檢數百餘人突入本宮執提小孫宗正卿李坡鎔梓岐出門解到法務衙門一路光景極其凶虐別設監禁今既踰旬其所拷掠無有不至繼聞漢城新報未知憑何見聞據爲的確抑白且應祖孫於窮天極宙之冤案援譬喻說日以益甚九有人心者一聞此名魂前魄越豈容忍刻視息於覆載之間乎第念惡名橫加都無端緒冤氣上徹幽鬼伸暴風聞各國有大疑案有各國大人會審之例區々微誠不能無望于

貴大人請

貴大人知照各館大人約日會同提出請犯此

在朝鮮國日本公使館

應祖孫對面查實辨此案件有罪斯受無罪則

伸俾此點時之冤復觀天日則此皆

貴大人之賜也謹肅函懇請

查照迅辦見覆施行至盼至祝此頌

日止不盡願言

李星應頓

我曆四月七日

MT

1615

1561

MT

1615

1560

戊午

第廿八號

敬啓者月前李宗正卿被逮一案曩准駐京
美國公使來文有所函詢於
貴大臣因得稍窺該案之概要乃於再昨日接
奉

雲峴宮末教內為囑本使會同列國使臣以審
辦此案事謹此將該函謄本呈 閱伏希

照鑒至於函內所載梓駁出所極其玄虛其所
拷掠無有不至等節倘果實有此事則恐誠非

所以待
朝家親貴之道即本使於貴我交好之誼自不能

無一言以致忠告之意仰望
貴政府之省慮也茲庸特爾耶寄鄙忱以供

閣下之參照肅此統冀
涵亮兼頌

台祉

伯爵井上馨頓

我五月四日

MT

1615 1563

MT

1615 1562

已名

敬啓者日前奉

大槓謹悉一切此次

宗正卿被執之變聲震聞此言案情重大

不知裏許祇增驚駭而已乃承

大教欲囑聲知照列國使臣令其會同審辦

命之下竊不能無惑焉何則此案本為貴國內

治所繫之一詔獄貴國既有司直之府固當

自行審斷惟至於

大東所載極其重一節如果此

事殊覺令人慘然倭使故聲特以友邦之

誼寄一書于貴國外部大臣聊以致鄙意矣

在朝鮮國日本公使館

微力所及止于此敬將寄金大臣書抄呈諸冀

明鑒順頌

大安

伯爵井上馨頓

我書

MT

1615

1565

MT

1615

1564

REEL No. 1-0714

0486

次官

閣了

親展送第三五號

親展

明治廿八年五月二十日起
同廿八年五月廿三日發遣

政務局長

七代

主任

外務大臣子爵陸奥宗光

内閣總理大臣伯爵伊藤博文殿

朝鮮内閣員動搖、件三附并上公使

ヨリ報告送付、件

朝鮮内閣員、公離英総辭職動議、

外務省

件三附別紙寫、通在京城并上公使ヨリ

報告有之、間右差進也

明治廿八年五月二十日發遣

MT

1615 1567

MT

1615 1566

REEL No. 1-0714

0487

奏せしなり

今國ノ獄事ノ開シ本使が處ニ奏上シタル貴
公臣來ノ慣例ナリ極刑ニ至ルが如キハ極
不十分ニ傳ハル日本ハ初回ノ開明ノ生ニ由政
改良ノ事ヲ勸告シ今貴政府ハ其勸告ヲ
各ニ取改改良ノ爲メ就テ可成ハリナリ
前ノ陋規ヲ矯正セバ可キ事ハ幸甚ナリ
來事ノ爲メは極力之ノ思慮ヲ用テ可キハ
一般ノ惡感ヲ來シ王座ヲ榮光ニ見シメ
コトナリナリ故ニ充分公平ニ其ノ實大ノ事ナリ
おダガハルハ可キ事ハ駐在ノ主ノ責ニ由ル
了以素同目ノ例ニ事ノ成行ニ注目シテ
賜ニ西ニ前ナリ俄米ニ使ハ外郊大也

在朝鮮國日本公使館

而見ニ多秘事アリテトテ口ニ追能本
使ニ對シテ使至金海ノ開シトノお談有之
本使ハ時節ヲお守リ思ヒシ其ノ不必用ナリ
以テ本ハ心ニ拒ミ置ケリ能ク此獄事ノ面
ニ至ラント至ハ世間ノ感嘆ニ因リ欲ニ貴
王有利ナリ同欲ニ本使微衷ノ好ミ
所多ク様々シキ事ニ先ツ特別法院
テ一考スルニ流經身ノ宣告ヲおサバ陛下ハ大
權ニ據リニ事ヲ裁裁シ流ナリ年ニ至セリ
タレヌク此特赦權ハ陛下ニ在リハ其日通
一般ノ慣例ニシテ而モ法律ニ至ル此明文
掲テアハ爾ナリ例ノ照ニ有之同敷ニ之就
ニ大君主ハ殊外ノ事ヲ收放ナリ其ハ我

MT

1615

1573

MT

1615

1572

ノ慣例トシテ此種獄卒ハ君權ト多ク何トモ
 能ハズ一服ヲ深ク飲ハシムルコトハ使ノ勅
 告ヲ持テ一條ノ血路ヲ示シ地多ク使ハル
 獄事以來大洗居府大夫ノ玉王ノ生玉母一
 夏阿悲歎ノ境遇ニ有テ黙止ニ付ク朕モ方
 之ニ夜食安カザリ折兩ハ使ノ勅告ニ出シ
 喊事ノ方法ヲ問フ以上ハ大ニ愁眉ノ間ヲ云
 トハ云々葉アリ由以上ノ義問及ニ勅告ハ第
 日五王ハ先王ノ忌辰日ニ執事ニ齊戒ノ典ヲ
 奉テサセラルル日極ニ引見ヲ許サレハ此旨令
 之ヲ云々内大寺ヲ經テ奏上スル事ナリ以テ
 依リ圖書記官ハ金署理大臣ノ稱奉テ登
 リ乞趣收報添又圖書記官ハ彼路人ニ
 在朝鮮國日本公使館

總理リ内閣ニ送リテ前取ノ如ク徐法新力奏
 試下ノ事日ノ金試ハ不納和ト成リ乞事ヲ承知
 セル趣是亦遂ニ一報告有テ之依之李王臣
 以方々在法部大臣ハ輕刑ヲ授減ハ其案ハ
 部ハ使嘴ニ云々之ヲ内閣ハ又王妃ノ弟勤
 世元力先ヲ内閣ハ輕刑ヲ授減ハ其案ハ
 底法部ハ流シ更セシムル事能ハズ信リ明
 形お事法部ハ内閣ハ河ニ更ニ送リテ可
 ノ忠告ヲ試ミテ是初ノ程ハ内閣ハ輕
 頑固ニ輕刑流シ王殿ニ容易ニ打合フ案
 乞元見ヘカリレカ是後ニ及テ李煥鑑主
 刑況ニ同意ハ事ニ成其他朴準陽李
 泰定ノ連類ニ送リテ喊刑スベキノ限ニ及ラ

MT

1615 1575

MT

1615 1574

昔々主君也し由はに同是に官に年と本後鑑ノ一
 身ノ終リノ向欲する地犯ノ威刑ト多トハ姑ク内
 ノ要ヲマシト相別レシム趣以修致生此ノサナ右
 本後鑑ノ事件ノ関シ内法西大由ニテ何故折
 ク極刑ヲ多シカレ中ノ一君シ此等諸反若
 シテ生存せしにキハ終ニ又死所南城少時
 復鑑言シテ更リヤ多知ハカ多果シキス多
 此後シテ貴ノ類ナカラニル後鑑ノ書ナリ
 ニテ終臨由金太心トノ曉病心ニ外ナリ
 故ニ事ナリテ地犯ノ(朴時陽外)處分
 毛酌減スレト主君ニ深ク入リトスハハ
 不味ク感シ事居賜ニ流着スハキス
 加之ナラキ即ノ目的ハ一ト本後鑑ノ威
 等ニ事ナリ今本後鑑威等説ニテ実行
 セラニ以上ハ他ハ先分望シヨリ多スルハ
 是威等其修致生此ノサナ右
 先是大院居ハ姑お法院ノ左側軍物舍
 此等諸反若ノ事ナリ今本後鑑威等説ニテ実行
 セラニ以上ハ他ハ先分望シヨリ多スルハ
 是威等其修致生此ノサナ右
 先是大院居ハ姑お法院ノ左側軍物舍
 此等諸反若ノ事ナリ今本後鑑威等説ニテ実行
 セラニ以上ハ他ハ先分望シヨリ多スルハ
 是威等其修致生此ノサナ右
 先是大院居ハ姑お法院ノ左側軍物舍

正明洋園日本公使館

MT 1615 1577

MT 1615 1576

大倉主ノ侍ニ云クノ密金ナリヲ察シ王ニ告グ大リクモノ
 此事判ルハ後ニ大蔵長ノ密告リ續テ府大吏人
 ナル大吏モ入堂シ初更次近ニ中ニテ云ク
 好ニテお書記ニテ王ニ告グ連ニ減刑ノ勅告
 シ大蔵長ノ所リニガハ一國ハ李煥鑑ノ勅命ト
 刑罰十年ニテ事ヲ親シ王王ヨリ御所ニ大
 ニ云ク此ノ思フカニ三人相謀ヘテ王ヨリ御所ニ大
 ニ云ク此ノ思フカニ三人相謀ヘテ王ヨリ御所ニ大
 鑑始ノ決起ノ裁判シ金告セリ其要款ハ如左
 被者朴世陽李若若李若若及羅トシノ言官柱
 田東錫崔在亨植ハ決起罪トシノ右文罪ト
 同李煥鑑韓祈錫金七善ハ決起罪トシノ
 情狀ノ如シ本刑ニ一考ノ減シ流行身ト同
 在朝鮮國日本公使館
 林璉陳許輝全所館ハ決起罪トシノ本刑ニ
 ニ二考ノ減シ各流十五年ト云ク此ハ李世陽
 徐西奎李永培金漢英張德鎔トシノ
 言順ハ決起罪トシノ各流行身ト同金九女
 李九女トシノ決起罪トシノ各流十五年ト
 同李西奎李永培金漢英張德鎔トシノ
 殺死加切ノ本刑ニ一考ノ減シ各流十五年ト
 云ク此ハ
 右官告後及王ヨリ即本月十日付テ李煥鑑
 ハ特赦ノ命ヲ下セテ二考ノ減刑トシ流十年
 ト云ク此ハ
 斯多光トシノ決起罪トシノ一考ノ減シ各流
 一般ノ感格ハ多シ此ハ王ヨリ云ク此ハ

MT

1615

1579

MT

1615

1578

オトナ大段多ハ深ク驚愕ノ色アリ多近ノ其
初先ノ其差所者此道徳山一或ハ妙思ト云
ニ下白ノ困ニ殊年ヲ送ルニ都生シ有レ
此ル由ヲ有之

左始事及報中ハ也

以迄其年其日也

特命全權大使伯奇丹上



外務省子爵陸奥宗元

追々本月二十日夜大段驚愕ノ色アリ多近ノ其
初先ノ其差所者此道徳山一或ハ妙思ト云
ニ下白ノ困ニ殊年ヲ送ルニ都生シ有レ
此ル由ヲ有之

在朝鮮國日本公使館

MT

1615 1581

MT

1615 1580

子賦

流刑分等加減例譯文

法律第四号

第一条 流刑分等は左ノ三等トシ其加減

例モ亦左ノ順序ニ依ル

一等 流終身

二等 流十五年

三等 流十年

第二条 現行刑律中流三千里ハ流終身ニ

流二千五百里ハ流十五年ニ流二千里ハ流十年

ト定ム

附則

此法律ハ公布ノ日より施行ス

在朝鮮國日本公使館

MT

1615 1582

特別法院ニ關スル量輕減刑譯文
 此法律ハ凡ソ
 特別法院ニ刑事裁判上ノ犯ノ情狀ノ酌量シ
 何等事件ニテ亦本刑ニ一等或ハ二等ノ
 輕減スルヲ得
 此法律ハ頒布セシヨリ施行ス

在朝鮮國日本公使館

MT 1615 1583

次官
張

政務局長

九

主
任

淨書
校正
淨原

親
康

文部省
文部省
文部省

内署瑞隆臣伯希和等奉旨文殿

大院君、爲皇三子、仁宗

以殷朝解至大陰里李坡銘墓，

外務省

隱憂暴政之終權設裁制而開進之

リタニ 頓事ニ関シ今般合國駐劄并上

後了別我通分報告方之方

李士英氏中書

別號梯密五方三五年 別號三

MIT

1615

15.85

MT

1615.

1584

次官

第五七五號

明治廿八年六月丁巳日起草
同廿八年六月十五日發遣

政務局長



主任

親展

外務省
文部大臣伊藤博文

内閣總理大臣伊藤博文

李振鐸處分報告件

過股朝鮮國於大隈元李振鐸等、傳傳

外務省

呈露之終、特別法院開庭、至、處分

田太夫之審理、末、股落、告、免、強、以

テ全國駐別井上公使、了、別、通、了、報

告、有、之、方、万、而、多、者、在、上、之、事、也、其

中、此、也

(別、通、傳、名、多、方、四、二、八、号、別、通、に、署、す)

浄書
平井
校正
原
通
原

MT

1615 1587

MT

1615 1586